

フランスにおける第一次世界大戦研究再訪

平野 千果子

はじめに

フランスにおける第一次世界大戦研究は、一九九〇年代から新たな展開をみせ、百周年を前に活況を呈した。筆者はかつてその状況をめぐって、一文をものしたことがある¹。本稿は、大戦研究のその後の進展を跡づけようとするものである。

拙稿でも紹介したことだが、二〇〇〇年代半ばのフランスにおける大戦研究は、ペロンヌ派とクラオンヌ派と呼ばれる二派の対立に注目が集まっていた。両派の議論には複数の論点があるのだが、一般には、また研究者の間ですら、一つに焦点化されて流布された感がある。再び研究史をたどるのは、百周年を経た今、改めて整理する必要があるからである。

はじめに拙稿で論じた点を簡単にまとめておこう。第一次世界大戦は、まさに世界に広がった戦争だったが、ド

イツとフランスの対立が一つの大きな軸だったことも確かである。しかし第二次世界大戦後のヨーロッパ統合の進展もあり、一九九〇年代に両国はきわめて良好な関係になっていった。そうしたなかでこの戦争に関する独仏の共同研究を進めるべく、一九九二年にはフランスのソンム県ペロンヌ市に歴史博物館 (Historial de la Grande Guerre) が設立された。政府肝いりの組織である。フランスのジャン・ジャック・ベケールやドイツのゲルト・クルマイヒなどの重鎮はペロンヌの顔と言つてよい存在で、大戦研究を牽引した。²

ここに集った研究者たちは、今日の独仏はきわめて友好な関係にあるのに、なぜ祖先たちはあれほどまでの戦争を戦い抜いたのか、という問いを立てた。その答えとして提示したのは、兵士たちが「敵への憎しみ」をもって戦うことに「同意」していた、というものだった。

それに対して一九九〇年代後半から、より周縁的な地位にある一部の研究者たちが、「同意」という見解に疑義を唱えた。実際には兵士たちには戦う以外の選択肢はなかったのであり、戦いに同意していたのではなく、強制されていたというのがその趣旨である。二〇〇五年一月、彼らはエーヌ県クラオンヌ市に拠点を置く「大戦の国際的研究と討論の会」(Collectif de Recherche International et de Débat sur la Guerre de 1914-1918、以下C R I Dと略記)を設立した。クラオンヌは一九一七年にシユマンデダムの激戦があったところで、兵士にとって過酷な戦闘を象徴する場となっている。³代表する研究者には、フレデリック・ルソーやニコラ・オフエンスタット、またレミー・キャザルなどの名があげられる。

こうして主張を違える両派は、それぞれ「ペロンヌ派」「クラオンヌ派」と呼びならわされていくことになる。のみならず、「同意派」「強制派」という名称とともに、二項対立としても広く流布されていった。

ところが近年、このような対立は「一時的」なもので、大戦開始百周年の頃には解消していたとする主張がなさ

れている。拙稿では同意／強制の論点のみを紹介したわけではなく、また強固な二項対立であるわけではない点にも、すでに言及しているのだが、百周年からもおよそ一〇年がたっていることもあり、改めて研究史の整理を試みるしだいである。それにあたってまず、近年の論調を紹介した後に、大戦研究の主要な論点として、「戦争文化」という概念をめぐる議論、次いで「文化史」と「社会史」という区分、最後に「野蛮化」というキーワードを軸に論じていくこととする。

一 対立は終わったのか

〔1〕大戦をめぐる議論

はじめに両派の対立が、大戦百周年の行事の前後に解消されているという現代史家の剣持久木氏の論を紹介しよう。主要な論考は三点ある（便宜的に刊行順に①、②、③とする）。

①「第一次世界大戦をどう伝えるか——独仏の例を中心として」広島市立大学広島平和研究所編『ふたつの世界大戦と現代世界』広島市立大学広島平和研究所、二〇一五年。

②「映画の中の世界大戦——戦争文化と「適応」をめぐる——鍋谷郁太郎編『第一次世界大戦と民間人——「武器を持たない」兵士の出現と戦後社会への影響』錦正社、二〇二二年。

③「公共史の中の歴史認識問題——アイルランド、東アジア、ヨーロッパ」『歴史学研究』第一〇二二号、二〇二二年四月。

いずれにおいても、百周年を迎えるころから対立は終息し、両派の間にはコンセンサスが形成されたと記されて

いる。それぞれ一部を引用しておく(傍線は引用者による)。

かくして、ペロンヌ派とクラオンヌ派は、世紀の変わり目をまたいで活発な論争を展開したが、その論争の過程で、それぞれ研究成果を蓄積している。そして百周年記念行事を前にして両者はほぼ「和解」していることを、筆者は、「同意」派の一人でペロンヌ博物館の現在の研究所長のステファヌ・オードワン・ルゾーから直接確認している。「中略」要は、「同意」か「強制」かという、メディアによって増幅された単純な二項対立は存在し得ない、という点で両者は一致しているようである(①一〇七頁)。

両者は、バリの研究機関を主に基盤とする前者と地方の大学に所属する後者というような対立構造も一時は見せていたが、二〇一四年に始まる大戦百周年記念行事の頃には、両者とも行事に協力するという形で対立は収斂する傾向、つまり、事実として、強制か自発性かの二項対立では説明できないというコンセンサスができたのである。(②三〇九頁)。

「ペロンヌ派の」この議論には、兵士の「同意」を強調しすぎである、軍規による「強制」の側面が重要であるとして、不服従兵士の銃殺事例に注目する研究者たちが対峙するという状況が「一時的に生まれている」。〔…〕ただこの対立は二〇一四年に始まる大戦一〇〇周年記念行事に際しては両派の研究者がともに協力する形で実質的に解消していく。つまり、大戦に参加した兵士の心情は、「同意」、「強制」いずれにも単純化することはできないという実態へのコンセンサスが形成されたのである。ただし、戦争表象については「戦争文化」論が

おおむね受容されたということも確認されている(③三三頁)。

誤解のないように述べておくなら、これらを引用するのは批判のためではない。以上の叙述が両派の対立を見直す際に適切な導きの糸となりうるからである。

また、やはり誤解のないように記すのだが、本稿は両派の対立が現在も続いていると主張したいわけではない。すでに拙稿でも述べたように、そもそも両者がそれぞれ「学派」を形成し、それが対立しているというような見立では論争の当初より、当事者(とりわけクラオンヌ派)からも否定されてきたことである。この点はご諒解いただきたい。

それを前提として、以上の引用からは二点ほどが指摘できる。一点目として、両派が和解したという具体的根拠が乏しいことである。唯一①で、ペロンヌ派のオドワンルゾー⁴からの伝聞である旨が記されているだけである。

ただ、氏はオドワンルゾーが二〇一四年に来日した際、本人から両派の対立は終わっていると聞いたことを、オドワンルゾーの論文を翻訳した際に、訳者解説のなかで記している。⁵ 仮にそうだとすると、出典注がないのはともかく、他方のクラオンヌ派に属する研究者の声が引用されていない。一方の側を代表する一人の研究者からの伝聞に基づく判断だけを根拠とするのは、歴史研究としてはまず気にかかる点である。しかも①では「両者は一致しているようである」と推測となっているが、②と③では「コンセンサスができた」「形成された」と断定されているのも、気にならないではない。

〔2〕同意派と強制派？

第二に、同意か強制かという論点にのみ収斂させていることである。この点は重要なので、やや丁寧にみていきたい。こうした対立の出発点は、ペロンヌ派の「同意」という見解に対して、強制の側面を指摘する研究者たちが異を唱えたことだった。最初に異論を呈したフレデリック・ルソーの『戦争と懲罰』（一九九九）に続いて、ニコラ・オフエンスタットと元軍人のアンドレ・バック將軍が、それぞれ『大戦の銃殺者と集合的記憶（一九四一—一九九九年）』（一九九九）、『見せしめの銃殺者たち——一九一四—一九一五年』（二〇〇三）といった研究を上梓している。⁶

劍持論文③では、「不服従兵士の銃殺事例」に注目する著者たちが「強制」を強く主張したとの見解が述べられるが、確かに銃殺刑はクラオンヌ派の主張を象徴すると受け取られる事例である。しかしオフエンスタットやバックの研究は、単に犠牲者としての兵士像を提示したものではない。

大戦中にはフランスで、六〇〇名を超える兵士が銃殺刑に処せられた。従来の定説では、銃殺されたのは一九一七年のシユマンデラムの戦いに際して反乱を起こした者が中心だとされてきた。二人の研究はそうした見解を大きく修正し、銃殺が最も多かったのは、開戦直後の二〇一四年秋だったことを明らかにした。その上で、銃殺の理由は反乱ではなく、考えていた以上に過酷だった戦場の状況を恐れをなした兵士たちが自傷行為を働いたために、当時は想定されていなかったこの行為に銃殺という重い刑が科されたことを、実証したものである。つまり二人の研究は、銃殺刑をめぐる研究史を大きく書き換える意味をもっていた。⁷同時に、銃殺刑が「見せしめ」だったという主張がなされ、そのことが戦いを強制された兵士像を象徴するものとなったのである。オフエンスタットの著作は、さらにその記憶が現在までどのように語られてきたのかにも目配りした、長期の視野をもつものである。

加えて、両派の見解の相違が「単純な二項対立」だとして、それは①にあるようにメディアが増幅したのだろうか。どのようなメディアなのか言及がないので判断できないが、実際にメディアはこの件にどれほどの影響力をもったのか、何よりも歴史家たち自身が、これらの用語に則った論を展開したことはないのだろうか、という疑問も浮かぶ。

「同意学派」「強制学派」と命名したのは、現代史家のアントワヌ・プロである。こうした名づけは、研究する立場からそこに相反する重要な論点を汲み取ったからではないか。事実、歴史家の間からは、いずれの派に属すると否とを問わず、この二つを意識した研究も刊行されていた。二〇世紀の両大戦を手掛けてきた歴史家ジャン・イヴ・ルナウールは二項対立に則った紹介をしているし、何よりも日本語もあるペロンヌ派のベケールとクルマイヒ共著の『仏独共同通史——第一次世界大戦』では、「兵士たちは強制されたのではなく、同意したのである。「大いなる同意」が兵士たちの行動の基本的側面である」と明言されている。このような叙述も印象に残るところである。このベケールとクルマイヒの原著は二〇〇八年の刊行である。時系列を見直せば、プロが同意学派、強制学派と名づけたのは二〇〇二年。おそらくそれを受けてのことと考えられるが、ルソーは翌二〇〇三年に出版された『戦争と懲罰』の第二版に新たに序文を書き下ろし、「強制学派などというものはない」と記した。¹¹ルソーの意図は、戦争に行つて戦う以外の選択肢がなかったにもかかわらず、「同意」のみを過度に重視する姿勢を戒めることにあったのであって、クラオンヌに集まる研究者がその点を軸に合意を形成しているような「学派」があるのではない、という主張である。

にもかかわらず、ペロンヌ派を代表する研究者が二〇〇八年の書物で改めて「同意」だったと断言したという展開が、時系列からは読み取れる。言い換えれば、批判された側が改めて同意だという自説を強調したわけである。ペロンヌ派の歴史家自身が、いかにこの点を重視しているかが読み取れよう。

対してルソーは百周年より一〇年以上も前に、「単純な二項対立」を否定していたことになる。百周年の前後から二項対立では説明できないというコンセンサスが形成されていた、という表現が果たして適切なのか、時系列を見直すなかからもこうした疑問が浮かんでこよう。見解の相違を単に同意か強制かという二項対立に還元するかのような姿勢には、研究者の間からも「歴史の矮小化」だとの指摘がなされていることは、筆者もすでに記したところである。¹²

やや横道にそれるが、ルソーはクラオンス派の「急先鋒」と目される歴史家である。¹³そしてペロンヌ派にも「急先鋒」とされる研究者がいる。クリストフ・プロシャソンである。学問的追究をはみ出すかのような言辞も表明されている。参考までにその主張をみておこう。いわく、クラオンス派は大戦とはほとんど関係ないことに精力を費やしている。ペロンヌにはパリ大学や社会科学高等研究院の研究者たちが集うのだが（プロシャソン自身、社会科学高等研究院にポストをもつ）、「シユマンデダムの人たち (les gens du "Chemin des Dames")」(彼らをこう呼ぼう、とプロシャソンは書いている)は公式の歴史の周辺にいて、現場からとか、下からの記憶とか言っている。使っている言葉をみても、喧嘩を売っているだけで、戦うために集まっているだけだ。厳しい言い方をすれば、科学的極左 (une espèce de gauchisme scientifique) とでもなる、云々。¹⁴

プロシャソンが指摘する「使っている言葉」とは、クラオンス派が自称する Collectif である。これは草の根運動の団体のような響きがある言葉で、およそ学問に携わる者にはふさわしくないということのようだ。以上に引いたのは『ル・モンド』紙に引用された文章で、プロシャソンが元はどのような媒体に書いたのかはわからないが、かなり感情的な面もあるように感じられる。¹⁵ 一方的にペロンヌの研究者がそうだというのではない。それは相互的なものだろう。これ以上は深入りしないが、一部であれ、関わる研究者自身の感情が昂じていることが、二項対立の

認識を外部の者にも強く印象づける結果を招いたのではないか。¹⁶

それでは二項対立として捉えることが「歴史の矮小化」だとして、さらに何が論点だったのだろうか。ペロンヌに集う研究者たちのキーワードの一つが「文化」だったのは知られている。詳細は後述するが、ペロンヌ派の主張を大まかに図式化するならば、一九九〇年代前後の独仏融和が進む環境下で、なぜ兵士たちは長期にわたって戦いを続けたのかを改めて問うなから、兵士たちが出ること、「同意」していた、という答えが導き出された。そこに戦場体験から「戦争文化」なるものが形成され、そうして引き起こされた心情（敵への憎しみ）に則って戦争が「野蛮化」し、それが後のファシズム、ひいては第二次世界大戦の蛮行へと引き継がれる、とまとめられよう。「野蛮化」がアメリカの歴史家ジョージ・モッセによる表現であるの言うまでもない。¹⁷そこで続く章では、これらの論点を順にたどることとする。

二 戦争文化をめぐって

〔1〕戦争文化という概念

戦争文化についてはかつて拙稿でも記したし、すでに周知のこととはいえ、まずは簡単に整理しておこう。この言葉を最初に使ったのは、ペロンヌ派で先にも言及したステファン・オドワン・ルゾーと、アネット・ベケールである。¹⁸彼らは、兵士たちが愛国心から戦いに「同意」し「敵への憎しみ」をもって凄惨な暴力を伴う戦争を遂行したとの立場に立つが、ここでいう兵士にはごく普通の一般市民も含まれている。つまり前線の兵士と銃後の市民のいずれもがこの種の感情を共有し、暴力を容認して積極的に戦争に加担したとする。著者たちは、そうした機運を

社会全体に共有させ、いわば前線と銃後をつないで戦争の継続を可能にしたものとして「戦争文化」という概念を提示した。それは言うなれば、当時の人びとが作り上げた、戦争に関する諸々の表象の場あるいは領域のことで、戦中だけではなく戦後にも力をもち続けたのだという。

ベケールとクルマイヒの共著では、「信念や行動は多様かつ複雑だが、何年にもわたる戦争の継続を支えつつ生きていくために折り合いをつけていこうとする態度を示すもの」とされる。それも最終的には「敵への憎しみ」という言葉に収斂させている。共著では、この概念は近年の研究において「定着した」と記している。¹⁹⁾

確かに戦争文化は、「文化」という言葉の親しみやすさもあつてか、日本でもよく使われるようになった。ただ言葉が身近な分、やや安易に用いられている感がしなくてもない。それは、こうした概念への批判が日本では読み落とされているのではないか、という疑問と背中合わせのものでもある。そこで次に、批判を少し追ってみた。

〔2〕戦争文化概念誕生の系譜

手掛かりとして、この概念を批判した歴史家たちによる二〇〇四年刊行の論文を取り上げよう。既出のオフエンスタット、ルソーなど、四名の研究者による「近年のある概念について——戦争文化」という小論である。²⁰⁾

著者たちは、まず研究史から説き起す。戦争文化を提唱したオドワン・ルゾーはジャン・ジャック・ベケールの弟子、一方のアネットはジャン・ジャックの娘である。二人はペロンヌ派の第二世代となる。J・J・ベケールは、フランスの国際関係史の先駆けであるピエール・ルヌヴァンの弟子だった。ルヌヴァンは大戦経験者で、シュマンデダムで片腕を失っている。戦後は政府からの依頼で開戦原因の研究に携わり、ドイツとオーストリアに主要な原因があるという見解を示した。これはイギリスやフランスの側にも責任を求める立場 (responsabilité

partagée)とは対立するものだった。

さらにこの戦争については、当事者による多くの手紙や手記が残されていて、戦後はそうした書き物や体験に基づく小説なども書かれ、兵士の悲惨な状況は知られていた。出征を押しつけられた「犠牲者としての兵士像」というのは、当時の主流の見方でもあった。それに対してルヌヴァンはといえば、ある時期までは証言などにも関心をもたず、そうした解釈は取っていないかった。

それがアナール派の影響もあって、ルヌヴァンは「深層諸力 (forces profondes)」という考えにたどり着く。²¹この概念自体は受容されてはいかないが、心性史の視角から世論などに関心をもつようになり、それが伝統的な外交史とは異なる分野としての「国際関係史」の確立につながった。ルヌヴァンの『ドイツ軍敗れたり』を訳した西海太郎は、ルヌヴァンは外交・軍事のみならず、各国の世論、国民の心性、経済、文化などの諸契機を採り入れたとし、国際関係史は文明史と切り離せないという立場をとったと明快に書いている。²²

そのルヌヴァンの弟子であるJ・J・ベケールは労働運動の研究から着手し、労働者の戦争への対応などを分析した博士論文「フランスの世論と第一次世界大戦の初期——一九一四年春から秋」(一九七六年)を書き上げた。これは翌年、『一九一四年——フランスはいかに戦争に入ったか』として刊行されている。続いて一九八〇年には『大戦のなかのフランス人』といった書物も世に問うた。²³これらの研究は、大戦期のフランス人が自国に深い帰属意識(adhesion)をもち、国民感情として深く戦争に「同意」していたとみる。それはペロンヌ派のいわゆる「同意」につながる道筋でもあるが、その要因は人びとの「文化」にあるというのがベケールの考えだった。

それを引き継いだのが、オドワン＝ルゾーだと上記の共著論文はいう。しかしオドワン＝ルゾーは、兵士の証言は採用しない。それは「記憶をゆがめる」(déformation du souvenir)ことになるからだという。証言を歴史研究

にどう採り入れるかというのは、今日でも議論があるところだろう。オドワン・ルゾーが史料として依拠したのは、塹壕の新聞（プレス）であり、それも将校や下士官のものが中心だった。ところがオドワン・ルゾーはそれらに基づきながら、兵士全体について論じたのだという。「戦争文化」というのはそうした研究のなから、とりわけ「国民感情」を表すものとして使われており、後にアネット・ベケールとともにこの概念が打ち出されていく。

〔3〕 批判

以上のような系譜に連なる二人が提唱した戦争文化概念に、共著論文はどのような批判を向けているのだろうか。主な論点は三つある。順にみていこう。第一に、単数で文化を語ることへの批判である。文化は担い手によって明らかに差がある（discrimination claire）にもかかわらず、単数で表現することで、当時の人がひとまとまりのものとして捉えられてしまうという。²⁴

そもそも戦争文化を形作る表象は、普遍的だったとは断言しがたい。著者たちは、戦争文化の元となるはずの戦争体験といっても、前線と後方に違いがあることは理解されるとしつつ、前線のアントワヌ・プロが、オドワン・ルゾーとA・ベケールの共編著『戦争を再発見する』で引用される証言は、前線よりは後方のものだと指摘している点に注意を促す。²⁵つまり引用される証言は、市民には該当しても兵士には当てはまらない可能性がある。共著論文は、それを一緒に語ることへの疑問を提示しているのである。しかも証言の多くは実は知識人のものである上に、証言についての史料批判も乏しいのだという。オドワン・ルゾーが、士官の史料に依拠して兵士全体に関して論じたという指摘が想起されるところである。

批判の二点目は、戦争文化が戦争の初期からあったとみえることである。文化なるものがさほど短期間に形成さ

れるのか、という疑問だと言い換えてもよい。著者たちは、「文化」という言葉の文化人類学的な使用について、時間を考慮していない点、つまり社会の進展やそれが現れる事件などへの配慮が少ない点で批判があるとし、それからすれば、大戦という大きな出来事を「文化」という言葉で考えること自体が困難であると述べる。オドワン＝ルゾーは、戦争文化の根は前の世紀にあるとするものの、その遡る時期の分析がないことも疑問視されている。言わねば、戦争文化は過程を経ずに形成され、かつ固定されたもののようにみえるが、具体的にはどのようなこの戦争文化が拡大し伝えられていったのかを、読者は知りたいのではないか、というのが第二の論点である。

これに関しては、たとえばベケールとクルマイヒの共著をみても、「プロパガンダによって「戦争文化」が創り出されたのではなく、「戦争文化」がすでにプロパガンダとして表現されている」と述べており、やはり形成過程が意識されているようにはみえない。

戦争文化という概念に納得しない歴史家から、「平和文化 (culture de paix)」が考えられるとする見解があることにも言及される。例としてあげられているのは、敵と同じ運命を共にしているという感情が生まれていたり、負傷者を互いに手当てしあうといった行為である。著者たちは、塹壕のなかにも「平時の社会的結合関係 (socialités du temps de paix)」が継続している状況だと表現している。²⁶

批判の三点目は、そもそも文化が説明するのか、という点である。この概念を提唱した二人の歴史家は、文化が戦いを形作り説明すると考えているようだが、文化そのものを説明し分析しないといけないのではないか、という問いである。つまり文化とは決定するもの (determination) というよりは条件 (condition) であって、文化自身が説明要素となるわけではない、文化とは社会全体を動かさしめるような堅固で厳格な (rigide) ものなのか、という問いを共著論文は投げかけている。²⁸

「文化」はあまりに身近な言葉であることから、「戦争文化」もさして抵抗なく受け入れられた面があるだろう。前述のように、今日では広汎に使われるのは確かである。オドワン・ルゾーは、この言葉はいまや、ピエール・ノラの「記憶の場」、フランソワ・フユレの「歴史の」逸脱、ノルベルト・エリアスの「文明化の過程」同様、一般名詞になったとまで述べている。²⁹ 実際、「戦争文化」は一般向けの概説書においても積極的に使われているようである。³⁰

共著論文の著者たちが投げかける問いは、身近な言葉であるがゆえに、逆に多くの問いを宙吊りにするのではないか、換言すれば、なじみの良さから内容を吟味しなくても使えてしまう言葉であるだけに、現実はもっと複雑なのでないか、ということであろう。筆者は未見だが、後になってオドワン・ルゾー自身がそうした点を一部認めているともいう。³¹

それではクラオンヌ派の批判に対し、ペロンヌ派はどう応答したのか、双方の間に議論や交流はあったのか。こうした点について、次に当事者同士の声を聴くこととしよう。

三 文化史と社会史——ラジオ討論から

〔1〕対話

第一次世界大戦の開戦百周年を前にした二〇一三年一月一七日、フランスのラジオ局、フランス・ラジオで、オドワン・ルゾーとオフエンスタットの討論番組が放送された。³² 両者ともにペロンヌ派とクラオンヌ派を代表する歴史家で、生年はそれぞれ一九五五年と一九六七年。一回り違うものの、ほぼ同世代といつてよいだろう（以下、本

章の討論部分に関しては、オドワン＝ルゾーはA、オフエンスタットはOと略記する。この対談は活字になっていないので目に触れにくいだが、きわめて重要な論点を含んでいるので、ここで取り上げることとしたい。

まず述べるべきは、討論の冒頭から二人が両派の対立、二つの学派などというものはないと声明していることである。Aは、学派があるならそのなかに均質性 (homogenité) があるはずだが、自分たちについてはそうではないと述べた。片やOは、ペロンヌ派と一括される歴史家の間に「ニュアンスの差」はあったと言えるところだ。

この点から興味深いのは、銃殺の問題を扱ったOの一九九九年の著書に対して、J・J・ベケールが『アナル』誌の書評欄で酷評したことである。いわく、六〇〇人の処刑は多いかもしれないが、一四〇万の死者のなかではごくわずかで、彼らの記憶に関する記述にも根拠がない、処刑が見せしめだったことが前提となっているが、そのようなものはなかった、などと断定している。また元々Oは中世史家なのだが、ベケールはそれゆえ彼が現代史研究において世論などをどう扱うべきか、方法論を身に着けていないのだろうとも書いている。そして最後は、この本が面白くないわけではなく、タイトルとずれた内容であるのが残念だと結んだ。ちなみにベケールは一九二八年生まれで、もちろんすでに地位ある歴史家であったのに対し、Oは刊行当時まだ三〇代の若手だった。それぞれの立場を思い起こすのも無駄ではあるまい。

他方、Aはいえ、戦争文化を扱った論文でもOの著作を注に掲げて注目していたし、ラジオ討論でも、Oの仕事は当初、好意的に受けとめられなかったが、自分は共感していたとしてその重要性に言及した。ベケールとは異なる評価からは、Oが言うペロンヌ派の間にあった「ニュアンスの差」の一端がうかがえよう。関連してAは、歴史研究にはつねに異なる「立ち位置 (position)」があると述べ、それが過大に解釈されてきたと表現している。拙稿にも記したことだが、かつて筆者は両派の対立に注目が集まっていた二〇〇八年一月に、両派を招いたラウ

ンドテーブルに参加したことがある。何が争点なのかを当事者たちに直接語ってもらおうという趣旨で、ペロンヌ派からはベケールとクルマイヒ、クラオンヌ派からはOとバックという豪華な顔ぶれだった。しかし互いに挨拶も交わさずに始まったなかで、双方が終始それぞれの主張を述べ立てるといった調子で進み、議論とは言えないまま終了時刻となった。³⁵

とげとげしい雰囲気のラウンドテーブルを思い起こせば、このラジオ討論からは、対立する二派の討論というものは、かなり異なる感をもたされる。歴史家の「立ち位置」という表現が端的に示すように、これは視角を異にする研究者二名の、ありうべき対話と捉えるのが妥当と思われる。Aが来日の際に、両派の対立は存在しえない、二項対立では説明できないということでコンセンサスが形成されたと言ったのには(剣持①)、おそらくこのラジオ討論の経験も含まれていたのではないか。

同時に興味深いのは、互いの主張をそれぞれ公刊されたもので読むではきたものの、両派の間で直接の議論や意見交換はなかったと、それぞれが口に行っていることである。「活発な論争を展開」(剣持①)することがないままに、しかし双方が違いを認識したうえで研究を発表し、双方がそれぞれを咀嚼していったというところのようである。

少なくとも以上から言えることは、ペロンヌ派、クラオンヌ派とおよそ呼べるグループはあっても、そのなかは当初から一枚岩ではなかったということだろう。ある意味、ルソーが二〇〇三年の増補版で述べていたことが、このときの二人の討論でようやく確認されたような感ももつ。ちなみにAは、いまや自身が属す第二世代だけでなく、間もなく第三世代の若手研究者が活躍しようとしているのに、こんな対立があるなどというのは、馬鹿にした話だと語気を強めた。いつまでも「同意と強制」という言葉に押し込められることに、さぞうんざりしていた様子が伝わる場面だった。

〔2〕論点

このラジオ討論は、二章で紹介した批判の共著論文に直接呼応しているわけではないが、いくつか示唆的な論点があった。以下では三点に絞ってそれらを確認していききたい。

第一に、過大に語られてきた同意と強制についてである。Aは「同意」というなかには、その他の選択肢がなく、戦いに行かざるを得ないという状況も含めていると発言した。既述のように、これはルソーがペロンヌ派への批判のなかですでに述べていた点である。Aはクラオンス派からの批判を検証するなかで、こうした表現を取り入れたものと考えられるがどうだろうか。いずれにせよAのこうした発言も、ペロンヌ派と一括されるなかに均質性があるわけではなく、Oの言うように、論者の間にニュアンスの差があることを表すものに思われる。二〇一六年（にラジオ討論より後の時期にあたることに注意したい）来日したクルマイヒは、やはり最後には「同意」を強調していたという報告がある³⁶。そうであるなら、なおさらである。

第二に左右の問題である。J・J・ベケールはオフエンスタットの書評のなかで、彼の著作は人権同盟の書き物や左翼の、あるいは平和主義者の書き物に依拠しているだけで、左翼の歴史ですらない、と切つて捨てている。それに直接呼応するものではないとはいえ、ラジオ討論でも左右は話題になった。

Aは、同意派は右、Oの側は左と認識されていると指摘した上で、こういう左右の読みは絶対的に拒絶すると、強い言葉を使った。銃殺された兵士の件は、右とか左とかで論じられるものではないというのである。Oの銃殺刑の仕事に同意すると発言したのは、この話題のときである。また銃殺された兵士たちは、戦いを放棄して祖国に貢献しなかったとみなされて、大戦の死者の記念碑に名前を刻まれることもない存在だが、Oやバックの仕事の延長には、彼らもそこに含めるべきだとこの考えがある。Aは、彼らを国民の記憶 (commémoration コメモラシオン)

に含めることにも、全面的な同意を表明した。

対してOは、自著は正義を論じたと受け取られたが、それは自分の意図とは違う、自分の書物は歴史書だと述べた。³⁷ 加えて銃殺刑をめぐるのは、各地で保守・右派の政治家も活動しているのであり、やはり左右の問題として論じられるものではないとした。

Aは、Oが進歩派 (progressiste) とみなされるのに対して、自身が保守 (conservateur) に分類されるのが不満なようで、苦笑しつつ自嘲するような物言いをするなど、和やかな雰囲気もあったことをつけ加えておこう。

〔3〕文化史と社会史

第三に、「文化史」「社会史」という区分けである。従来もこの両派に言及される際、この区分けが語られてきた。ルナウルなどは、早くにそうした表現をした一人である。³⁸ ただしラジオ討論からは、この点は他の項目と並列されるのではなく、双方がきわめて重視していることが伝わった。同時に、相違が最も際立った点でもあった。Oは、それこそが「決定的な問題 (une question cruciale)」だと発言している。最後にやや長くなるが、この点について述べていきたい。

前述のように、もともとペロンヌ派は文化に注視しており、Aは以下のような主張をした。すなわち、社会的な側面を重視するのは正しいことだが、同時に文化史は社会と切り離されて (déconnectée) はいない。人びとの間に社会階層の相違や地域ごとの差異があるとして、第一次世界大戦を表象の歴史という視角で見るとき、戦争という生死のかかる根源的な体験は、人びとを均質化する (homogénéiser) 性質があるし、その後の人生にも大きな影響を残すのだという。

それに対してOは、自身は銃殺刑を扱ったが、クラオンヌ派のルソー、あるいはアンドレ・ルーズの研究が、戦時の兵士のありように社会史的なアプローチを試みてきたことを指摘して、彼らが兵士の証言の収集・紹介に精力を費やしてきた面を強調した。ペロンヌ派が扱った史料は、将校レベルなど上層のものが多かったことは、改めて想起される。³⁹

クラオンヌ派で最も活発に公刊している一人としては、レミー・キャザルの名をあげるべきだろう。ルソーと共編の『一四一八年——ある世代の叫び』（二〇〇一）、キャザル自身の編んだ『大戦をめぐる五〇〇人の証言』（二〇一三）、アンドレ・ルーズと共編の『一四一八年——塹壕で生きることと死ぬこと』（二〇二二）など、多くの書物にかかわっている。⁴⁰

またOは言及していないが、百周年を前にした二〇一三年には、自身とルーズの共編で『大戦——百周年の手帳』が刊行されている。⁴¹ 図版や写真、語彙説明が豊富で、「記憶」と題した章では長期のスパンでの記述がある。クラオンヌ派の特徴が表れた一冊とみえる。百周年の行事に両派から協力があつたことが、研究の視角が同じになったことを意味しないのは、言うまでもあるまい。

ところでAの言うように、戦争に相違を乗り越える面があるとすれば、当然にしてナシヨナリズムの問題を考えなければなるまい。拙稿ですでに論じたことだが、重複をいとわず少し補足してみたい。ペロンヌ派のJ・J・ベケールは、国民統合という観点から大戦期における愛国心を強調した。それに対してクラオンヌ派の立ち位置は、二〇一〇年のシンポジウムの報告書に読み取れる。キャザルやルーズが編集した『アイデンティティの動揺、一九一四―一九一八年——戦争の試練にさらされる社会的・国民的帰属』（二〇一一）である。⁴² 本論集は、戦争にかかわった人びとのアイデンティティをめぐって、前線と銃後を問わず、社会階層、出身（フランスの諸地方やヨー

ロッパ各地、アメリカ先住民)、あるいは職業やジェンダーなどから分析したもので、国家を単位とする戦争において、ベネディクト・アンダーソンの言う「想像の共同体」をモデルとするナショナル・アイデンティティが強烈に感じられる点を確認する一方、それぞれの異なる位相のアイデンティティがナショナル・アイデンティティとつねに緊張関係にあり、それが長引く戦争のなかでどのように変容していったのかを考察したものである。いわば、ナショナルなものに回収されない部分に着目している。拙稿の引用をお許しいただきたい。

本書のような作業は、国民国家の完成といったある種の予定調和的な語りでは見えなくなってしまうさまざまな偏差を、戦争の時代を通して読み解く具体的な挑戦と言えるだろう。向かう方向性はペロンヌ派と正反対にみえるが、こうした読解が単に国民統合の物語を相対化するものだと、必ずしも思われない。むしろ一枚岩的なナショナル・アイデンティティの捉え方に異議をささみつつ、アイデンティティは重層的に織りなされるものだという認識の下に、異なる位相のアイデンティティに注意を向けることで、「国民」というものの奥行きを深めようとしているようにみえる。このようなアプローチからすれば、仮に兵士が戦い続けたのはなぜかを問うにしても、国民感情が広汎に根づいたことを前提に問題化するという方法そのものが、再考に付されることになるだろう。⁴³

こうした点に関連づけて理解されると思われるが、ラジオ討論でOが高く評価したのが、ニコラ・マリオの研究である。言及されたのは二〇〇三年の論文だが、それを含めてマリオはその後、『塹壕で一体となる——一九一四〜一九一八年』(二〇一三)を上梓している。⁴⁵ここではそちらを参照したい。⁴⁴

それによれば、戦争においては社会的カテゴリーの相違を超えて、戦った者の間に連帯感が生まれ、相違が均質化されると考えられてきた。知識人たちの書き物でも、この戦争で普段は接点のない労働者階級の人びと、すなわち社会階層や経済状況、あるいは生活環境や文化が違う民衆層 (*classe populaire*) と出会い、同胞として一体感を共有したという側面に注目されてきた。マリオが言及するうち、日本でもよく知られている名前をあげるなら、アンリ・バルビュス、ロラン・ドルジュレス、マルク・ブロック、アラン・デュアメルあたりだろうか。Aの見解はそれに沿うものといえよう。

しかしマリオは異なる側面に注目する。同じ著者たちの書き物から、当時の社会のヒエラルキーが前線において温存され維持される (*perpetuation*) 状況があったことがまた読み取れる、というのがマリオの主張である。つまり異なる社会層に属する人びとの間に相互浸透が起きたり、るつぽに溶け込むような事態になったりしたのではない、それどころか社会的相違が凝縮され、感情の面でもそうした様相が明確に浮かび上がったというのである。⁴⁶

言葉を換えれば、Aを含め、ペロンヌ派が上層部の者の史料に依拠していたのに対し、クラオンヌ派は兵士たちの証言を重視してきたと本稿でも述べてきたが、マリオは上層の者と一般の兵士、双方の史料に異なる視角から目配りすることで、それぞれの相違がむしろ強化されている側面を読み取ったのである。これはきわめて興味深い観察だといえるべきだろう。二人の相違が明確になった文化史／社会史という区分から再考するならば、同意か強制かというのがいかに表層的な捉え方であるか、十二分に示されているのではないか。

以上がおよそ紹介すべき主要な論点だが、討論で論じられなかったキーワードが一つある。それが「野蛮化」である。次章ではこの点を取り上げるが、ラジオ討論の検討を閉じるにあたり、Aの言を引用しておきたい。彼は両派の対立の構図が、当事者たちの実際の考えとは離れて同意と強制のみに注目されたような状況を嘆きつつ、書物

がいかにかに「不完全に、また部分的にしか (imparfaitement, partiellement)」読まれないかとの感慨を口にしたのである。これは時と場所を問わず、多少とも研究者が普遍的に感じることではないだろうか。僭越ながら筆者もまた自戒しつつ、感慨深く聞いたところである。

四 野蛮化

〔1〕野蛮化に関する研究

そこで野蛮化だが、そもそもこの概念は、フランス史においてはあまり触れられてこなかった。これをめぐっては二点を紹介しておこう。一つはアネット・ベケールの『第一次世界大戦の忘れられた者たち——人道主義と戦争文化』(二九九八)である。⁴⁷

序文でベケールは、モッセの「野蛮化」について「誰も免れることができなかった」として、この概念は「第一次世界大戦を理解するのにあまりに決定的 (si décisif) だった」と述べる。⁴⁸それを語るために、本書は忘れられた者たちとして戦争捕虜とドイツに占領された地域の住民に焦点を当て、まずは彼らがいかに戦禍のなかで過酷な状況におかれたのか、一般市民に対する戦争の暴力を通して叙述する。次いでそれらの人びとに対して人道支援を模索した国際赤十字委員会 (ICRC = Comité international de la Croix-Rouge) の活動をたどる。そして最後に、そうした人道支援には限界があり、結局は戦後ヨーロッパ社会が野蛮化するなかから、第二次世界大戦／ナチの蛮行に至る経緯を描き、野蛮化を免れなかった状況を描いている。

本書の副題にある「戦争文化」を明確に説明する箇所はないが、おそらくは時期的に他の著作で論じたばかりで

あり、それでよしとしたのである。いずれにしても戦争文化という言葉を打ち出した本人が、その概念を基に野蛮化にいたる側面をたどった書となっている。版元のサイトには、モッセが提起したヨーロッパ社会の野蛮化という概念に、具体的な形を与える書物だとの宣伝文が記されている。⁴⁹ 第一次世界大戦の捕虜や、C I C Rの活動に焦点を当てたのは新しいことであり、その意味でも先駆的な著作といえよう。

ただ翌年に出された書評は、やや辛口だった。評者は現代史家のジャン・クロード・ファルシーである。⁵⁰ 法制史が専門のようで、第一次世界大戦の強制収容所に関する著作もある。ファルシーは、C I C Rなどの分析を評価しつつ、第一次世界大戦の捕虜の境遇からナチズムの死の収容所へと結びつけることに疑義を唱えた。第二次世界大戦のドイツ占領期のフランスでは、若者を強制的にドイツでの労働に送り出した「強制労働徴用 (Service du Travail Obligatoire)」が知られている。ファルシーは、それと比較すべきではないかとする。要するに、第一次世界大戦の捕虜や収容された市民を取り巻く暴力から、第二次世界大戦の暴力へと展開していくことの説明が不十分だとの結論である。第一次世界大戦期の捕虜の問題に注目した点など、別の評価はあるだろうが、本来の趣旨である野蛮化については、A・ベケールは評者を説得しきれなかったようである。

実はフランスでは当初から、「野蛮化」の議論に対しては批判的なまなざしがあった。それを表すものとして、次にアントワヌ・プロの論文、「野蛮化の限界——西部戦線で殺すということ、一九一四〜一九一八年」(二〇〇四)に移ることにしよう。まずプロは、モッセは「社会の野蛮化」を記述したのに、フランス語の訳書からは「個人の野蛮化」を語ったかのように受け取られているとして、⁵¹ 自身もこの側面に注目すると断っている。

それにあたってプロが用いるのは、出征兵士の手記である。そこからプロは、個々の兵士の戦争体験が野蛮化につながっていたとは、なかなか断じ難いことを論じている。大戦は、砲弾など相手が見えない状況で殺すといえ、

兵士同士が戦場で対面することもあった。その場合、殺した者もいれば殺さない者もいた。そして一般に考えられるのは反対に、皆が敵兵を殺したのではなく、むしろ殺さないケースが多かったという。⁵²

加えて、兵士は「野蛮 (brute)」になったから殺したわけでもない。殺した兵士には「罪の意識」があるし、「後悔の念」を記さないものも稀であって、当然、戦後に複雑な感情を残したことが諒解される。

プロは、野蛮化には限界があったと結論するが、理由を三つあげている。第一に、後の日米戦争やベトナム戦争の際の人種観に相応するものがなかったこと、⁵³ 第二には、上層部が即決処刑を命じた場合があるとして、軍規から外れるほどの殺人は結局は罰せられた、つまり軍法会議が機能したことである。以上の二点をプロは、西部戦線において野蛮化が限られていたことの根拠としている。

そして第三に、野蛮化した人がいたとして、戦後に市民生活にもどって以後もその性向が継続したのかと問い、史料の裏付けは不十分とはいえ、プロ自身は、人格の根底まで変わったとは考えないと述べている。

プロの考察への評価はあくが、野蛮化それ自体をめぐる議論は、さほど進展していないと思われるので、以下では関連していくつかの論点を記すにとどめたい。

〔2〕いくつかの見解

そもそも野蛮化を促すとされる「敵への憎しみ」の感情は、それを戦争文化と呼ぶかはともかく、どちらかといえば敗者に該当するのではないだろうか。これは何らかの法則を見出そうとするものではなく、少なくとも第一次世界大戦期の独仏に関しては、敗者となったドイツにおいて憎しみが増幅される状況が続いたとみえるからである。たとえば戦後、ドイツの賠償金支払いをめぐる、フランスとベルギーがドイツのラインラントに進駐する事態

となった。この時、進駐したフランス軍のなかに植民地出身の兵士がいたことは、今では知られていよう。「白人の国ドイツ」に対して「黒人兵」を送りこむことが大きな「侮辱」として受け取られ、ドイツではこれに反対して批判する国際的なキャンペーンも大々的に展開された。⁵⁴

ドイツにおいて、この「黒い恥辱」と呼びならわされるものが社会で沸騰していたとき、フランスは一九二〇年代のいわゆる「狂乱の時代 (Les années folles)」を迎えていた。従来とは異なる多様な文化が新たに見出されるなど、戦後の解放感を謳歌していた時期である。⁵⁵ ドイツ人を「ボッシュ (Boche) 」「ドイツ野郎」⁵⁶ などと呼ぶことは、普仏戦争での敗北以来、流布していたが、この時期それは憎しみというよりは、端的に蔑視の表現だった。ドイツがフランスより野蛮だったと主張したのではない。フランスでは野蛮化と表現される状況とは、やや異なる光景が広がっていたと思われるのである。

では勝者となったフランスについては、何が指摘できるかだろうか。フランスにおけるアラブ世界研究の第一人者であるアンリ・ロランスは、二〇二二年、やはりフランス・ラジオの連続講義で「戦争文化と平和文化——戦闘員から犠牲者へ」と題した回を設けている。⁵⁷ そのなかでロランスは、英仏では戦間期に平和主義 (pacifisme) が広まったとし、それは植民地帝国ゆえだと述べる。植民地が一九三〇年代の危機の時代に、本国に有益だったのはよく語られるところだが、本国の若者に大きな可能性を開いた面もあった。たとえば植民地は単独では発展できないと考えられ、本国から種々の分野の専門家が赴くが、その際、本国では高い地位につけないような若輩者が、植民地では要職を占めることがあった。ロランスは、三〇歳の建築家がレバノンの建築部門の責任者に就任した事例をあげている。

つまりロランスは、イギリスやフランスの場合は植民地の存在が本国におけるファシズムの伸長を防いだのに対

し、植民地という生存圏をもたなかったドイツやイタリアではファシズムが伸長し、野蛮化につながったのだという。この種の議論自体は新しくないともみえるが、植民地帝国をもった英仏で起きたような状況をロランスは、大戦研究で人口に膾炙するようになった戦争文化に対して「平和文化」という言葉で表現している。⁵⁸これは既述のように、戦争文化批判の共著論文でも、言及された言葉である。ちょうど大戦の勝者と敗者が、植民地の保有の有無、さらにいえば野蛮化をめぐる状況に重なる形となっている。植民地史研究に携わる者として、こうした方向性をめざしているわけではないが、一つの見解として興味深いと思われる。

〔3〕教育の面から

野蛮化に関してはもう一点、教育の観点から触れておきたい。それにはレミー・キャザルとキャロリーヌ・バララが編んだ『大戦を教える』（二〇一八）を参照しよう。本書はキャザルの名からクラオンヌ派の仕事とわかるが、二〇一七年一〇月に二日にわたって開かれたシンポジウムの報告集で、一八点の小論を収めている。そのなかではヨアン・シャノワールの論考「大戦を三時間で?——中学高校における教育要領に関する考察」に、本稿の関心に沿う論点への言及がある。⁵⁹著者の基本的立場は、戦争文化という概念も、それを基に野蛮化したという側面も否定するものである。その上で戦争文化や野蛮化の概念を通して戦争を捉える視角を「ペロンヌ化 (peronnisation)」と表現して、それはもう通用しないと述べている。実際、国民教育省が二〇一六年に立ち上げた教員向けの情報サイト (Edusol) では、二〇一二年に記載のあった「野蛮化」という言葉が、二〇一五年には削除されているという。それでも実際の教科書を見れば、見出しの言葉はともかく、両派の見解にそれぞれ触れる教科書もある一方、**「戦争文化」**という言葉掲載し、ペロンヌ派の読みに沿った解説を載せるものも、やはりあるようである。

要するにペロンヌ派が打ち立てた見解が、およそ書かれているということだろう。この論点を扱った末尾に著者が指摘するのは、教師の養成に際して、若い世代の批判精神を養うためにも、史学史の研究をしつかりと提示することの重要性である。教科書執筆の多くは高校教師だからというのもその理由としてあげられている。

ただし、ペロンヌ派批判が著者の目的ではない点も言明すべきだろう。教育要領の分析で、中等教育で大戦に割かれる時間（論文のタイトルにあるように三時間）の中身を検討しつつ、これには二つの柱があると指摘する。戦闘員の経験（*expérience combattante*）と総力戦（*guerre totale*）である。戦闘員は兵士のみではなく、銃後の市民も戦闘員と呼べる存在だったことを考えれば、経験は複数形で語られる必要があるとしたうえで、それら多様な経験のなかから戦争文化という「一つの」概念が生じ、それが戦争の野蛮化を生み、さらには戦争が総力戦化して、結果として大戦が総力戦だった、というのが教育要領の中身だと述べている。

この大筋の流れはペロンヌ派の主張で、それへの批判も記されているわけだが、著者はそれとは別に、この戦争が総力戦だったという見解を否定している。総力戦というのは、歴史の単純化だということである。先にあげた教員向けサイトのEdusolも、戦争文化という言葉は用いながらも、この戦争は「総力戦化しつつあった」（*une guerre en voie de totalisation*）とするのみだという。

しかもペロンヌ派のJ・J・ベケールも、総力戦説を何度も否定していると述べている。理由としてあげられているのは、軍と民間の区別がなくならなかったことである。本書は詳細な注のある書物ではないし、参考文献にもベケールの著作は掲載されていないので確認することはできないが、実際、近年の研究では、この大戦が当初から総力戦として始まったわけではなく、戦争が続けられる「過程」で「総力戦化」していったと考えるのが、より実態に即しているとの指摘がある。⁶⁰この点についてこれ以上は踏み込まないが、少なくともシャノワールの論文が教

条主義的な批判をペロンヌ派に向けているのではないことは、記しておく。

ただ、本書が二〇一八年の刊行であることにも注意すべきだろう。百周年を超えてなお、両派の相違が残っている様相が読み取れるからである。くだいようだが、堅固な「学派」として分断されていると主張したいのではない。オドワン＝ルゾーの言う、立ち位置の違いが継続しているところだろうか。そのような現状において、立場を違える研究者たちの異なる視角がないものとして扱われてよいわけではないだろう。

二派の対立というテーマに戻るならば、同意と強制の二項対立では説明できないというコンセンサスが両者の間に形成された一方で、戦争文化に関しては同意派の考えが認められ、戦争文化論がおおむね受容された（剣持③）という整理が状況を把握したものなのか、以上の点を含めて考え直す必要があると思われる。⁶¹

結びに代えて

『大戦を教える』の刊行と同じ二〇一八年、クラオンヌ派のルソーが新著『一四〇一八年——愛国主義を考える』を上梓した。⁶² それを受けて行われた『ル・モンド』紙のインタヴューでルソーは、対立は終わっていないと改めて述べている。百周年の記念行事で議論は終結したとみる者もあるようだとしながら、自分はそうは感じていないという。⁶³

ルソーは、強制学派はないと二〇〇三年に記した当の本人だが、本書は同意や野蠻化という概念への批判であり、要するにペロンヌ派への批判となっている。ただし、単に批判にとどまるのではなく、二派の見解の相違を基に、続く第二次世界大戦に分析の視野を広げようとしている。基本的な立ち位置の違いが、異なる時代に関しても異

なる読みを促すことはあるだろう。

ルソーが批判する研究者たちが集うペロンヌ市の歴史博物館は、独仏政府の肝いりで創設された場であることはすでに述べたが、そこは単に独仏の共同研究にとどまらず、いまだでは国際的な連携が広がっている。オフエンスタットの言葉を借りれば「ニュアンスの差をもちながら」ではあるが、国内外の著名な研究機関にポストをもつ有力な研究者が集まっているし、留学生も多い。実際、今日のフランスにおいて第一次世界大戦研究を牽引しているのは、この場に関わる研究者たちである。彼らが「ペロンヌ派」なのであれば、その意図の有無にかかわらず、ペロンヌ派こそがこの研究分野の権威であることは否定すべくもない。⁶⁴

二〇一七年五月、長年クラオンヌ派の組織C R I Dの副会長の任にあったバック将軍が逝去した。バックは仲間宛てた遺言のような一文を残している。いわく、自分たちのグループはペロンヌ派のようなロビー活動の力をもたないが、地域に根差した研究者の交流から多くを学んできた、ペロンヌ派に媚びを売る必要はない、史料に従って研究を進めていくように。⁶⁵ ここには色濃いうるサンチマンのようなものも感じられるが、地方大学に身を置く小さな集団ゆえのわだかまりもあるように思う。研究者として人間である。感情的なしこりもあるであろう。そうであるなら、第一次世界大戦に関する博士論文が提出されると、このテーマには中立だと考えられる一九世紀史の専門家が審査と呼ばれる現状がまだあるというのも、うなずける。

そうした面を残しつつ、二派の対立が今日の大戦研究を性格づけているのでは、もちろんない。そのような見方は再度の歴史の矮小化となるだろう。少なくとも、いずれの側につくか、若手研究者に踏み絵を迫るような状況はもはや終わっているし、⁶⁷ 研究は進んでいる。本稿では第三章で、クラオンヌ派のニコラ・マリオの著作にすでに言及したので、ここではペロンヌの研究者たちが編んだ論文集『一九一四―一九一八年の戦争のなかで——受容する、

耐える、拒絶する』(二〇一五)を取り上げることとした⁶⁸。編者(ニコラ・ボブレ、ヘザー・ジョーンズ、アンヌ・ラスムセン)にもフランス人以外の研究者が加わっており、欧米の著名な執筆者が寄稿している。そうした知性を集めた本論集は研究の刷新を目指すものだが、序文を記したレオナード・V・スミスは、いわゆる同意と強制という二項対立を乗り越えることも目標の一つに掲げている⁶⁹。

本論集ではとくに、エマニュエル・サン＝フュシアン⁷⁰の論考「裁くことと裁かれること——第一次世界大戦期の軍における被告、罪、不法行為」が有益である。この論文は戦争文化を広く捉えた探究といえる。オフェンスタットや、とりわけバックの銃殺刑に関する研究は、軍事史料を涉猟し、どのような行為でどのような兵士が裁かれたかという個人レベルの情報を緻密に蓄積したものであった。サン＝フュシアンはそれらを参照しつつ、軍事裁判は戦争文化を映す鏡か、という問いを立てている。個々人に着目するよりは、何が裁かれたのか、どう裁いたのか、といった観点から考えることで、戦争文化を単に文学作品や映画としてとらえず、より幅広くいけば政治文化として考察しようとしたのである。その結果、軍の規範はそれ自身のもつ政治文化を簡単には乗り越えられなかった、というのが結論として導かれている。

こうした結論の是非はともかく、同意を重視する立場を批判した側を否定するのではなく、異なる角度に議論を開いたこのような論考は、マリオの著作とは別の意味で、まさに研究が進展することだとの感をもつ。サン＝フュシアンの論考が目を引くのは、最初に「同意」という考えを提示した歴史家たちの側から、批判の論点を探り入れ、新しい世代も交えて新たな大戦像が提示された作品とみえるからである。

ちなみにサン＝フュシアンには、第一次世界大戦で兵士として戦った学校の教師をテーマにした論文がある⁷¹。教師たちは、他の兵士と同じだったのか、という問題提起である。兵士を塊としてとらえず、そのなかに様々なファ

クターによる重層性を見出そうとする姿勢といつてよい。それはまさに、クラオンヌ派の研究者たちに重なるものではあるまいか。こうした研究にじかに接すれば、二派の対立などが頭をよぎることすらないだろう。対立があったとして、それは双方が歩み寄ってコンセンサスが形成されたというよりは、異なる見解を認識しつつ双方の側で研究が進展して次の段階に進んだという、あるべき経過をたどったように筆者にはみえる。

それでは二項対立のものとして語られてきた歴史は、今日どのように評価できるだろうか。つまり同意と強制という二項対立が歴史の矮小化で、多分に作り上げられたものだったとして、それは大戦研究に何を残したのだろうか。

最後にそうした点について、オドワン＝ルゾーとオフェンスタットのラジオ討論での見解を参照しておこう。オフェンスタットは、結果が否定的なものだけとは思わないと述べた。直接の交流がなくても、それぞれが議論を精緻化する必要に迫られたし、出てきた成果を見れば、相互に参照し深めてきたことがわかるというのである。筆者がすぐ前に述べたのは、まさにこのことである。⁷²

他方、オドワン＝ルゾーは、この概念はさして科学的でなかったとし、相互の議論や交流がないままに、それぞれの側で研究を深めたが、この論争によって奪われたものについても考える必要があると説いた。そこには若手研究者への悪影響もあっただろうか。しかし今日興味深いこととして、第一次世界大戦研究が実際に進展し、そして国際化された点を指摘した。東部戦線など、まだこれからの分野もあるという。⁷³

本稿第四章では、西部戦線においては野蠻化が限られていたとするプロの議論を紹介したが、東部戦線ではどうだったのか。大戦をめぐるさまざまなキーワードも、東からのまなざしを加えて考えるならば、さらに海外植民地の状況を加味するならば、⁷⁴あるいは異なる場における総力戦化の過程を子細にみるならば、考察の興行きはさらに

深まるだろう。百周年は、二派の対立の終焉に重なったというよりは、新たな研究が進展する一つの通過点だったように思われる。

※本稿は科研究費の基盤研究（B）「第一次世界大戦と「戦争文化」——「敵を憎む心」の形成と戦後社会への影響」による研究成果の一部である。

- 1 拙稿「フランスにおける第一次世界大戦研究の現在」『思想』第一〇六一号、二〇一二年九月。
- 2 二人には独仏の共同研究を象徴するものとして共著があり、日本語にも翻訳されている。ジャン＝ジャック・ベッケール、ゲルト・クルマイヒ、剣持久木・西山暁義訳『仏独共同通史・第一次世界大戦』上下、岩波書店、二〇一二年。ちなみに本書では、第一次世界大戦は基本的に独仏の戦争だったと記している。二一世紀に入ってからからの書物としてはやや偏った見解とも思われ、この点に關してはさまざまな場で批判が寄せられた。彼らと協同する海外の研究者たちや彼らの下で学ぶ若手研究者が執筆したものには、基本的に独仏の戦争だったとの断りを入れた上で、多様なテーマを扱うものがあるようである。たとえば次を参照。Li Ma (dir.), *Les travaux chinois en France dans la Première Guerre mondiale*, Paris, CNRS éditions, 2012.
- 3 CRID 創設の前年に、それまで二〇一六年のヴェルダンやソムムの戦いに比して言及されることの少なかったシユマンデダムに関する論集がオフエンスタットによって編まれている。Nicolas Offenstadt (dir.), *Le chemin des Dames : de l'échec à la mémoire*, Paris, Stock, 2004.
- 4 人名の表記についてだが、本稿では「オードワン」ではなく「オドワン」、また「ベッケール」ではなく「ベケール」と記す。ただし刊行物の記載はそれを踏襲する。
- 5 ステファヌ・オードワン＝ルゾー、剣持久木訳「今日のフランスにおける第一次世界大戦」『軍事史学』第五〇巻、第三十四号、二〇一五年三月。
- 6 Frédéric Rousseau, *La guerre censurée : une histoire des combattants européens de 14-18*, Paris, Seuil, 1999, 2003, 2014; Nicolas Offenstadt, *Les fastilles de la Grande guerre et la mémoire collective (1914-1999)*, Paris, Odile Jacob, 1999, 2009; André Bach, *Fastilles pour l'exemple : 1914-1915*, Paris, Tallandier, 2003.
- 7 前掲拙稿、12-14頁。

- 8 ノロは「言ひなれば (en quelque sorte)」と「同じ同意字派と強制字派と記しよる」。Antoine Prost, « La guerre de 1914 n'est pas perdue », *Mouvement social*, n° 199, avril-juin 2002, p. 98.
- 9 Jean-Yves Le Naour, « Le champ de bataille des historiens », *La Vie des idées*, 10 novembre 2008. またウラオニス派に属すわけではないものの、以下のやうに強制の面を強調する著作もある。François Roux, *La Grande Guerre inconnue : les poilus contre l'armée française*, Paris, Éditions de Paris, 2006. また第一次世界大戦に関する事典の類は数多くあるが、ルナウールも一点、刊行しよる。Jean-Yves Le Naour, *Dictionnaire de la Grande Guerre*, Paris, Larousse, 2008.
- 10 スッケール、クルマイニ前掲書、下巻、九九頁。
- 11 Rousseau, *op.cit.*, p.22.
- 12 Le Naour, « Le champ de bataille des historiens », *op.cit.* 前掲拙稿、一二頁でも引用。
- 13 劍持①のルソーをめぐりに形容しよる(一〇六頁)。
- 14 Cité dans Jean Birnbaum, « 1914-1918 : guerre de tranchées entre historiens », *Le Monde*, 10 mars 2006.
- 15 プロシヤンは、第一次世界大戦に関しよる複数の著作がある。例えば以下を参照。Christophe Prochasson, *14-18 : retours d'expériences*, Paris, Tallandier, 2008. 二〇〇七年のフランス大統領選挙では「傲慢な右派」に対して社会党候補のセクレース・ロワイヤルに投票しようという呼び掛けに、数十人の知識人が署名したものが『スヴェル・オブセルヴァトゥール』紙電子版に掲載された。プロシヤンも署名した一人だが、政治的立場を示す側面ではある。https://www.nouvelobs.com/politique/elections-2007/20070227.OBS4464/avant-qui-ne-soit-trop-tard.html
- 16 スッケール、クルマイニ前掲書では「批判の急先鋒」のルソーについて次のやうに記している。「戦争終結以来、定期的かつ周期的に、「歴史家たち」——とらうりはたいていの場合、売名を狙う広告業者たち——が、兵士たちの勇気を全く認めず、彼らをたんに気が狂った惨めな砲弾の餌食に仕立てまうしてきた。最近の一人がフレデリック・ルソーである」(下巻、九七頁)。ちなみに「広告業者たち」の原語は « propagandistes » である (Jean-Jacques Becker et Gerd Krumeich, *La Grande Guerre : une histoire franco-allemande*, Paris, Tallandier, 2008 et 2012, p. 227)。この訳語が適切か否かはおくが、自分たちとは異なる説を(場合によっては自分たちへの批判も)辛辣に書き立てる研究者(この場合はルソー)について、売名行為だと揶揄したものであろう。確かに、ある分野の「権威」を批判することは売名行為ともなりうるだろうが、ペロンス派を代表する研究者の筆になるものとしてまさに適切か否か、考えさせられる文章ではある。
- またやや後の書物ではあるが、ルソー自身は開戦百周年に当たる二〇一四年に論集『社会科学の大戦』を編んでいる (Frédéric Rousseau (dir.), *La Grande Guerre des sciences sociales*, Outremont (Québec), Athéna, 2014)。この書にこのやうな書評もあ

- すべての人が好意をもつものではないだろうし、ときに「無意味に攻撃的な語調」があるとの指摘もなされている。ただしこの書評はルソンの論集を、その手法を含めて評価するものではない。Erwan Le Gall. « Le manifest sociohistorien » (http://enenvor.fr/eo_actu/livres/frederic_rousseau_le_sociohistorien_insonmis.html)
- 17 ショーミン・L・モッセ『英霊——世界大戦の記憶の再構築』宮武実知子訳、柏書房、二〇〇二年。本書の改訳版（すくすく書芸文庫二〇二二年）では「野蠻化」という言葉に置き換えられているが、フランス語では「野蠻になつた」(ensauvagement)という語もしばしば使われる場合もあり（cf. Le Naour, « Le champ de bataille des historiens », op.cit.）本稿では従来の「野蠻化」を使ふことをお断りしておく。
- 18 Stéphane Audoin-Rouzeau et Annette Becker. « Vers une histoire culturelle de la Première Guerre mondiale », *Vingtième siècle*, n° 41, janvier-mars 1994, pp. 57-114. *Id.*, 14-18, *retrouver la guerre*, Paris, Gallimard, 2000. 冊誌「一〇—」一頁を参照。
- 19 ミッケール・クルマイヒ前掲書「上巻」一二五頁。
- 20 N. Offenstadt, P. Olivera, E. Ricard et F. Rousseau. « A propos d'une notion récente : la culture de guerre », F. Rousseau (dir.), *Guerres, paix et sociétés : 1911-1946*, 2004, pp. 667-674.
- 21 Cf. Pierre Renouvin et Jean-Baptiste Duroselle, *Introduction à l'histoire des relations internationales*, Paris, Armand Colin, 1991, 4^e éd.; Robert Frank (dir.), *Pour l'histoire des relations internationales*, Paris, PUF, 2012, Chapitre 1.
- 22 ジョエル・ルヌーヴァン、西海太郎編訳『マイン軍敗れたり』白水社、一九八七年、一四五頁。
- 23 Jean-Jacques Becker, 1914 : *comment les Français sont entrés dans la guerre : contribution à l'étude de l'opinion publique printemps-été 1914*, Paris, Presse de la FNSP, 1977. *Id.*, *Les Français dans la guerre*, Paris, Robert Laffont, 1980.
- 24 相違なく共著論文では「nation, ethnic, classe」などがあげられる。また「ベロヌス派のサルマン・トルメンタ」[感情の複数性]を指摘していること。
- 25 共著論文ではプロの次の論文が引用されている。Prost, « La guerre de 1914 n'est pas perdue », op.cit., p. 100.
- 26 ベッケール, クルマイヒ前掲書「上巻」一二八頁。
- 27 共著論文では明示されていないが、次の文献には「誇張された憎しみの文化」「隠された平和文化」という小見出しを付した短い節がある。Remy Cazals et Frédéric Rousseau, 14-18 : *le cri d'une génération*, Toulouse, Privat, 2001, p. 148.
- 28 これらの点についてはその研究が参照されている。Nicolas Mariot, « Faut-il être motivé pour tuer ? sur quelques explications aux violences de guerre », *Genèses*, n° 53, 2003 ; Joël Zask, « Nature, donc culture : remarques sur les liens de parenté entre l'anthropologie culturelle et la philosophie pragmatiste de John Dewey », *Genèse*, n° 50, 2003.

- 29 Stéphane Audoin-Rouzeau. « Les cultures de guerre », in Benoît Pellistrandi et Jean-François Sirinelli (ed.), *L'histoire culturelle en France et en Espagne*. Madrid, Casa de Velázquez, 2008, pp. 289-299. (<https://books.openedition.org/cvz/15303>)
- 30 たゞは以下がすべてである。Nicolas Beaupré, *1914-1915 : Les grandes guerres*. Paris, Belin, 2014 (2012), p. 182. < ロンヌ派の歴史家による本書は、二つの世界大戦をカバールする時期を扱っており、第一次世界大戦研究から生まれたこの概念を、他の戦争に適合して用ひはめようとする記述がある。>
- 31 Cf. Stéphane Audoin-Rouzeau. « Historiographie et histoire culturelle du Premier conflit mondial : une nouvelle approche par la culture de guerre ? », in Jules Maurin, Jean-Charles Jauffret (ed.), *La grande guerre 1914-1918 : 80 ans d'historiographie et de représentations*. Montpellier, Université Paul Valéry - Montpellier III (E. S. I. D.), 2003. さらに戦争文化が一般名詞となったと記しているオドワノール・リーの論文は、「複数の戦争文化」の概念を提起したものである。第一次世界大戦のなかでの複数というよりは、それぞれの戦争に固有の戦争文化があるという文脈ではあるが、批判を意識して、自説をより洗練するために取り入れたとも考えられる。Audoin-Rouzeau. « Les cultures de guerre », op.cit.
- 32 Radio France, Guerre et société 4/4, La fabrique de l'histoire avec Stéphane Audoin-Rouzeau et Nicolas Offenstadt. « Débat : la querelle du consentement, partir à la guerre : contrainte ou enthousiasme ? », émission du 17 janvier 2013. (<https://www.radiofrance.fr/franceculture/podcasts/la-fabrique-de-l-histoire/guerre-et-societe-4-4-9062444>)
- 33 Compte-rendu de Jean-Jacques Becker, *Annales, histoire, sciences sociales*, vol.51-1, 2001, pp.265-267. 前掲拙稿でもすでに言及してある(一六頁)。
- 34 Audoin-Rouzeau et A. Becker, *Retrouver la guerre, op.cit.*, p. 7, note 1.
- 35 Table ronde dans le cadre des « Lundis de la BDIC (Bibliothèque de documentation internationale contemporaine) », 24 janvier 2008. 前掲拙稿「一五一―一六頁」。
- 36 鍋谷郁太郎「ドイツ民衆は第一次世界大戦を「耐え抜く」・「耐える」についての試論」鍋谷郁太郎編『第一次世界大戦と民間人——「武器を持たない」兵士の出現と戦後社会への影響』錦正社、二〇一二年、五三頁。
- 37 オフェンスタットは人権同盟の副会長シル・マンズロンが編集する論集に寄稿している。Nicolas Offenstadt, « Les "crimes des Conseils de guerre" de la Grande Guerre », Gilles Manceron et Madeleine Reberieux (dir), *Droits de l'homme : combats du siècle*, Nanterre, BDIC / Paris, Seuil, 2004.
- 38 Le Naour, « Le champ de bataille des historiens », op.cit.
- 39 前掲拙稿では「ルソーの『大戦——社会経験として』を引用している(一六頁)」。ここに改めて載せておきたい。「ルソーは本書で、

- 40 「文化史を重視する側から」表象」が強調されてきたが、そうした立場を超えて、人びとが何を実践し何を体験したのか、現実在即して探究していくべきだと述べた。つまり戦争そのものを社会、政治、心のありよう、経済、そして文化といったあらゆる側面から検証する」ことが求められているという主張である。それをルソーは「大戦の全体史」の試みだとも記している」(Frédéric Rousseau, *La Grande Guerre en tant qu'expériences sociales*, Paris, Ellipses Marketing, 2006, pp.3-4)。
- 41 Cazals et Rousseau, *14-18 : le cri d'une génération, op.cit.* ; Rémy Cazals (dir.), *500 témoins de la Grande Guerre*, Portets-sur-Garonne, Editions Midi-pyrénéennes, 2013 ; Rémy Cazals et André Loez, *14-18 : vivre et mourir dans les tranchées*, Paris, Tallandier, 2021.
- 42 André Loez et Nicolas Offenstadt, *La grande guerre : carnet du centenaire*, Paris, Albin Michel, 2013.
- 43 François Bouloc, Rémy Cazals et André Loez (dir.), *Identités troubles 1914-1918 : les appartenances sociales et nationales à l'épreuve de la guerre*, Toulouse, Privat, 2011.
- 44 前掲拙稿、19頁。
- 45 Mariot, op.cit.
- 46 Nicolas Mariot, *Tous unis dans la tranchée. 1914-1918, les intellectuels rencontrent le peuple*, Paris, Seuil, 2013.
- 47 *Ibid.*、マリオは前出の論文集『マインメンテナーの動揺』で、A・ルースと共著の巻頭論文を執筆しているが、マリオもすでに同様の主張を展開している。André Loez et Nicolas Mariot, « Brassage des corps et distances sociales : la découverte du peuple par la bourgeoisie intellectuelle dans les tranchées de 1914-1918 », in Bouloc, Cazals et Loez (dir.), op.cit.
- 48 Annette Becker, *Oubliés de la Grande Guerre : humanitaire et culture de guerre*, Paris, Noésis, 1998 (Fayard/Pluriel, 2012).
- 49 *Ibid.*, p. 20.
- 50 Editions Fayard, <https://www.fayard.fr/pluriel/oubliés-de-la-grande-guerre-9782818503034>
- 51 Jean-Claude Farcy, Compte rendu d'Annette Becker, *Oubliés de la Grande Guerre*, in *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, tome 46, n° 4, 1999.
- 52 Antoine Prost, « Les limites de la brutalisation : tuer sur le front occidental 1914-1918 », *Vingtième siècle, revue d'histoire*, n° 81, janvier 2004, p. 6.
- 53 殺さなかった兵士の方が手記を残しているのでは、との見方もあろうが、戦争では敵は殺すべきなのであり、殺さなかった場合の方が批判されることも考えられる。それからすれば、殺さなかった兵士の手記が特段多く残されていることも単純には言えないだろう。プロは、国民の戦争 (guerre nationale) からイデオロギー的、人種的戦争 (guerre idéologique et raciale) の間には明らかな断絶

- があり、第一次世界大戦ではその観点から野蛮化が限定的だったという。
- 54 「黒い恥辱」については以下を参照されたい。弓削尚子「ドイツにおける戦争とネイション・「人種」——「黒い恥辱」を起点に考える」加藤千香子、細谷実編『シエンダー史叢書第5巻 暴力と戦争』明石書店、二〇〇九年。拙著『人種主義の歴史』岩波新書、二〇二二年、一九四—一九九頁。
- 55 アメリカ発のジャズが広まったり、アフリカ芸術に関心が高まったりしたし、黒人レヴューなどが人気を博してもいた。
- 56 フランス語辞典 *Peut Robert* によれば、この語の初出は一八七九年である。
- 57 Henry Laurens, « Culture de guerre et culture de paix : du combattant à la victime », *Radio France, Série « Le passé imposé », émission du 2 juin 2022.* (<https://www.radiofrance.fr/franceculture/podcasts/les-cours-du-college-de-france/culture-de-guerre-et-culture-de-peace-du-combattant-a-la-victime-9632221>)
- 58 ロレンスはむしろ「平和文化」を広げる意味から論じている。 Cf. Henry Laurens, « Comment affronter le passé ? : la France et ses historiens face aux violences du premier XX^e siècle », *Le Débat*, n° 174, février 2013.
- 59 Yohann Chanoir, « La Grande Guerre en trois heures ? réflexion sur les programmes des lycées et collèges », in Remy Cazals et Caroline Barrera (dir.), *Enseigner la Grande Guerre* (Actes du colloque, abbaye-école de Sorèze, 21-22 octobre 2017), Portets-sur-Garonne, Editions Midi-pyrénéennes, Illustrated édition, 2018.
- 60 山室信一、岡田暁生、小関隆、藤原辰史編『現代の起点 第二次世界大戦』(岩波書店、二〇一四年)の第二巻は「総力戦」と題されているが、この総説「戦争を生きたる」を執筆した藤原辰史は、「本巻の各論文が扱うのもまた、総力戦というよりは、総力戦化過程の諸相である」と述べている(二二—二二頁)。強調は原文。
- 61 剣持②は、「二派の対立が「戦争文化」に収斂したとする立場から、第一次世界大戦を題材とした映画をテーマとする論考である。ここでは、「戦争文化」を伝えると剣持が主張する作品について、「強制か自発性かの論争を経て収斂した「戦争文化」表象が反映されている」(三〇九頁)と記されている。「戦争文化表象」という言葉が妥当かの判断はおくが、戦争文化がそのようなものなのかは、再考の余地があると思われる。
- 62 ちなみに二〇二三年五月二七日、ドイツのフライブルク大学教授ヨルク・レオハルト (Jörg Leonhard) 氏を迎えてのワークショップが東京であった。その際、氏自身は「戦争文化」という言葉を積極的に使っているが、これをめぐってはドイツでもまだ議論があるとの発言があった(メモを記しておく)。
- 63 Frédéric Rousseau, *14-18 : penser le patriotisme*, Paris, Gallimard, 2018.
- 64 « Les combattants de la Grande Guerre, fervents patriotes ou victimes de la contrainte étatique ? », *Le Monde*, 9 novembre 2018.

- 64 C R I D の『』は「国際 (international)」の略だし、クラオンス派も国外の研究者たちとの共同研究を進めている。後に C R I D を創設する研究者たちが、一九九〇年代に開催した国際的なシンポジウムもあることを記している。その報告書には、おもにロンヌ派と協同しているレオナード・V・スミスやジョン・ホーンなどの英語圏の研究者の名前もみえる。国外の研究者からすれば、フランスの二派の「対立」などは大戦研究の主要な分岐線ではなく、フランスでもよく知られている。 Cf. Sylvie Caucanas et Remy Cazals, conclusions par Marc Ferro, *Traces de 14-18 : Actes du colloque de Carcassonne*, Carcassonne, Les Audiois, 1997.
- 65 André Bach, « Commémoration : texte important du général Bach », Forum Pages 14-18, Les combattants & l'histoire de la Grande Guerre, 11 novembre 2017. (<https://forum.pages1418.com/viewtopic.php?t=38838>)
- 66 本稿第一章は、ロンヌ派のプロシヤンがその種のことを書いていたと紹介したが、ルソーはギンブリエ第三大学の教授、キヤザルはトゥールーズ大学名誉教授である。ルソーはバリーの出版社からも本を上梓しているが、クラオンス派の多くはトゥールーズなど地方の出版社からの刊行が多い。
- 67 Maxence Bonnefoy, « Consentement ou contrainte ? Enseigner l'expérience combattante pendant la Première Guerre mondiale en classe de Première L/ES », sous la direction d'Olivier Chatelet, Lyon : Université Jean Moulin (Lyon 3), Mémoire soutenu le 12/06/2019, p. 28.
- 68 Nicolas Beaupré, Heather Jones, Anne Rasmussen et le Comité directeur du Centre international de recherche de l'Historial de la Grande Guerre (dir), *Dans la guerre 1914-1918 : accepter, endurer, résister*, Paris, Les Belles lettres, 2015.
- 69 Leonard V. Smith, « Accepter, refuser, endurer », in Nicolas Beaupré et al (dir.), *op.cit.*, pp. 14-15.
- 70 Emmanuel Saint-Fuscien, « Juger et être jugé : prévenus, crimes et délits au sein des armées de la Grande Guerre », Nicolas Beaupré et al. (dir.), *op.cit.*
- 71 Emmanuel Saint-Fuscien, « Les instituteurs combattants de la Grande Guerre : des soldats comme les autres ? », Jean-François Condatte, *Les Ecoles dans la guerre : acteurs et institutions éducatives dans les tourments guerriers (XVIII^e - XX^e siècles)*, Villeneuve d'Ascq, Presses universitaires du Septentrion, 2014.
- 72 つけ加えるなら、いさかかといえは、ロンヌ派がクラオンス派の見解を取り入れていた点に筆者にはみえるが。
- 73 新しい研究として、女性史に関連する著作を挙げておく。 Bertrand Goujon, *Je maintiendrai : femmes, nobles et Français 1914-1919*, Paris, Vendémiaire, 2022. オドワン＝ルソーも複数の研究書を刊行しているが、その中に一九九四年にアフリカのルワンダで起きた虐殺について畑違いの分野に関心を寄せ、一書を上梓している点も記しておきたいだろう。 Stéphane Audoin-Rouzeau, *Une initiation : Rwanda (1994-2016)*, Paris, Seuil, 2017. 本書にはアフリカ史家からルワンダへの無知をわざわざ抽出している「私」や

書くところを「私たち」と、無知の主体を広げているという厳しい批判が寄せられているが、大戦研究にインスピレーションを受けている面（犠牲者の身体を展示するメモリアル訪問、コメモラシオンの儀式、生存者たちとの出会い）が読み取れて興味深い。 Cf. Claudine Vidal, « Les voyages de Stéphane Audoin-Rouzeau au Rwanda : à propos de Stéphane Audoin-Rouzeau, *The initiation. Rwanda (1994-2016)*, Paris, Seuil, 2017 », *OpenEdition Journals*, 2018, <https://journals.openedition.org/lectures/24102> フランス植民地に関してはすでに一つの見方を示しているのび、さちらを参照されたい。拙著『アフリカを活用する——フランス植民地からみた第一次世界大戦』人文書院、二〇一四年。

※本稿で参照したインターネットサイトはすべて二〇二三年二月一七日に最終閲覧し確認している。

